

ファッションに的絞りと紙糸で自立化

昨年を境に急速に広がり始めた「和紙糸」。軽く、通気性や吸水性など機能に優れ、環境にも優しい。14年には和紙がユネスコ無形文化遺産に登録され、その注目は高まるばかりだ。広島県福山市にある備後燃糸は、そんな和紙糸の生産販売に力を入れる。長年培った燃糸技術を基に開発した和紙糸を手、自立化を目指している。

備後燃糸

「和紙糸が軌道に乗り始めたのは、この1~2年の話なんです」と話すのは、4代目の光成明浩社長。05年の入社以来、和紙糸の企画と営業を担当する。自販比率を売上げの半分にまで高めた自立化の立役者でもある。創業は1927年。会社がある芦田町一帯は、備後耕織の地として知られる。周辺にはユニフォームや学生服メーカーも多く、古くから繊維産業で栄えた。同社も創業以来、紡績や商社からの委託加工を手がけてきた。

しかしバブル崩壊以降、徐々に委託加工は減少していく。従来はロットも大きく備蓄生産が可能だったが、急速に小ロット・短納期化が進んだ。手間もコストも増えた一方、「加工賃は変わらなかった」。最盛期には500社近くあった周辺の燃糸業は、10社にまで減った。

ファッション向けに

和紙糸を開発したのは、生き残りの道を模索していた04年のこと。以来、委託加工の間を縫うように和紙糸の拡販を続け、14年に一気に拡大。ついに15年、和紙糸の売上げが全体の半分に達した。

同社の和紙糸の特徴は、ファッション用途に絞って開発した点にある。現在はニット・布帛用それぞれに、和紙10%糸、和紙・ポリエステル交差糸の2種類を販売する。太さは綿糸換算で20、27番手などを揃える。高温での染色や家庭洗濯にも対応でき、肌触りは柔らかい。

本来和紙は、伸度がなく耐久性も低い。糸切れなどの不具合も発

生しやすく、各工程で和紙に適した生産方法の確立が必須となる。そこで同社では、原紙の選定から生産工程に至るまで、各工程の業者と連携し、ファッションを意識した開発を続けてきた。

原紙は愛媛県四国中央市の白川製紙の紙を使う。「世界遺産の和紙も含め様々な紙を試したが、ここが一番。共同開発にも協力的だった」。水に溶けず、強度がありながらも柔らかい機械漉きの和紙を別注。それを外部工場に幅1~4mmに裁断したものが原糸として備後燃糸に運ばれ、燃糸工程に入る。

まず通るのが、複数の糸を引き揃える「合糸」工程。この段階で各糸が奇麗に引き揃っていないと、スナール（突起）が出た不良糸になってしまう。「糸と糸のお見合い」と呼ばれるほど、仕上がりを左右する重要な工程だ。特に和紙×ポリエステルなど、性質の異なる糸同士は難しい。職人が糸種ごとにテンションやスピードを微調整し、出来を確認しながら作業を進める。

その後、通常の約5~7割という低スピードで、1000回前後の強燃をかける。強燃することで糸の強度が増し、多少の伸度も付与できる。ただし強燃糸は、糸を伸ばした際に縮れてしま



燃糸機がずらりと並ぶ工場内。機械は24時間動いている。

燃糸の魅力を広めたい



燃糸前に複数の糸を引き揃える合糸の工程は、「燃糸の命」と呼ばれるほど出来を左右する（上）、手前が和紙をスリットした原糸。その後合糸、燃糸の工程を経て和紙糸が完成する（下）

いい、織ったり編んだり難しい。そこで同社では専用機で熱を加え、アイロンの要領で糸の縮れを取り除く。さらに織機や編み機での糸滑りを良くするため、糸表面をワックスでコーティングすれば完成だ。

ニットや機屋のことを考えて作られた同社の和紙糸は、扱いやすく風合いも良いと、評価が高い。特にポリエステル混のものは市場に少なく、着心地や価格競争力に優れるため、引き合いが増えている。

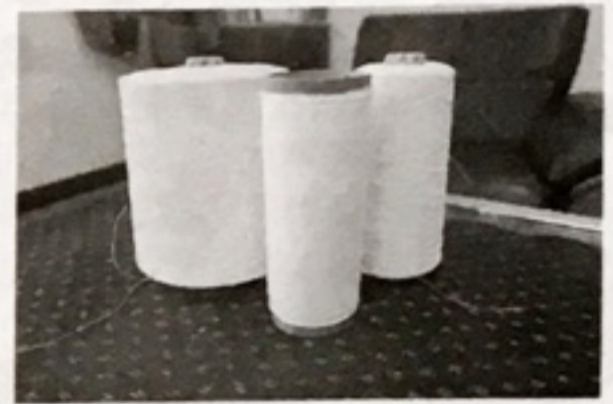
燃糸から糸メーカーへ

和紙糸が柱事業となった今、同社はさらに先を見据える。「全国で燃糸業が減るなか、なんとか技術を残さなければ。今まで影に隠れていたが、これからは自ら発信していく必要がある。和紙糸はその第一歩です」

そもそも燃糸業は、ファッション業界に欠かせない存在だ。毛羽の発生を抑える、糸の強度を増す、織りや編みの効率を上げる、生地を風合いを良くする——これらは全て燃糸の効果。ファッション用途では、全ての糸が燃糸を通ると言っても過言ではない。にもかかわらず、業界内で燃糸が話題に上がることは少ない。燃糸は糸生産に付帯する単純な加工との認識が一般的なためだ。事実、デザインや

機能性で差別化しやすい生地メーカーと比べ、燃糸業の自立は遅れている。他産地でも燃糸スペースの減少は喫緊の課題だ。

同社では今年から、和紙糸を「備和」（びんわ）ブランドで売り出し始めた。自社ホームページを整え、次回ジャパン・ヤーン・フェアへの出展準備も進める。和紙糸を通して燃糸の役割や技術を業界に訴求し、付加価値を高める狙いだ。「燃糸を工夫すれば、素材の差別化策は



まだまだある。燃糸のプロとして、業界と連携しながら他にない素材を提案していきたい」。燃糸の魅力を広める取り組みは、まだ始まったばかりだ。



備後燃糸

住所：広島県福山市芦田町福田872

電話：084・958・3355

設備：ダブルツイスター5台、アップツイスター5台、ダブルツイスター合糸用5台、アップツイスター合糸用4台、ヒートセット1台、ワインダー3台

昔ながらのノコギリ屋根の工場。周辺の燃糸工場は500社から10社近くまで減ったという

可能性は大きい

異業界を経て32歳で家業に入った光成社長は、自販のほか、工賃の値上げ交渉や若い職人の育成など、従来の仕組みを変えようとして取り組み始めた。長年の慣習を破り、産地から後ろ指をさされることも多かったという。だが今の同社があるのは、めげずに改革を進めてきたからだ。

その光成社長が取材の終盤、「大それた夢なんですけど…」という前置きの上

で、今後の目標を教えてください。「いつか、1000人に1人でいい。店頭で『良い燃りだね』って洋服を選ぶ人が出てくれば」確かに今は大きな夢かもしれない。だが今まで隠れていた分、燃糸に秘められた可能性は大きいはず。全ての洋服は糸から始まる。近い未来店頭で、燃糸の素晴らしさを語る光景が見られるかもしれない。

(井上真央)

記者メモ

和紙糸の販売が軌道に乗った今も研究と改良は続けられている。その鍵となるのが、縦の連携だ。

5年前、同社が中心となり「紙糸研究会」を発足した。メンバーは白川製紙、スリッター加工の日本紙糸、糸染めの阪南チース染晒協同組合、丸編み生地の山崎繊維工業、ニットの製品のアイトープの計6社。

年に5回、糸から製品まで各工程の専門家が集まり、和紙糸の可能性を探っている。販売面でも、備後燃糸が生地営業に同行して糸の強みを説明するなど、連携を深めている。

チェックポイント

縦の連携で競争力高める

研究会の出席者は40代が中心。産地縮小が進む中、共通の問題意識を持つ同世代とつながれる貴重な場だ。お互いの専門知識や販路を補い合い、商品や技術の競争力を高めている。